
ラブカクテルス その19

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その19

【Nコード】

N9656C

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は貴方好みの可愛いカクテルをお作りいたしました。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は究極の美貌でございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は可愛い。

その証拠に、幼稚園の頃から男の子に声を掛けられっぱなしだ。

それが当たり前。

私が好き嫌いに関わらずに、大概の男の人は私を自分のものにしたがる。

私としては疲れるだけだが。

そんな中から私はお気に入りの男の人を選ぶ。そして付き合ってみて合わなかったり、他にいい人が近づいてきたら、迷わず取り替えた。

でも、責める人はいない。

だって私は可愛いのだから。

中にはお金持ちもいた。

一時はそれもいいと思っただが、なんでも買うという、あつさりした行為にすぐ飽きがきたし、そういう人は一緒にいて楽しかった試しがなく、今はあまりこだわっていない。

かといって、いくらイイ人とはいえ、貧乏すぎるのもキツイ話だが。

でも、二人の間に少し障害があるのは、たまには情熱的になれて、嫌いではない。

長距離恋愛や、はたまた不倫。さては二股。

でも、大概は途中で面倒になり止めてしまう。

それでも私の隣には必ず誰か素敵な人がいる。私は可愛いから。

そんなある日、また私の前に素敵な人が現れた。しかし今度はいつもと違っていた。

彼は私には、あまり興味をいだかないようだった。

私はそんな普段と違うパターンに、少し興奮を覚えた。しかしその内彼も、私に声を掛けてくるだろう。

だって私は可愛い。内気で奥手なのだろうか？

しかし彼は一向に私に近づいて来なかった。

そんなに奥手なのかと思えばそうでもなく、他の女の子には声を掛けているし、しかも誰だれを食事に誘っていたなんて噂も聞いた。何故だろう。私は可愛いのに。

私の頭の中は、その内彼で一杯になった。

どうしたら彼は振り向いてくれるのだろうか。

私は、私から彼に声を掛けるべきか悩んだ。なにしろ私は、私から誰かに声を掛けたことがなかった。

なぜならそんな必要がなかったからだった。

私は初めてそんなドキドキを感じた。
楽しい。これが恋か。しかし私には、男の人に声を掛けるなんて勇氣はなかった。

どうすればよいのだろう。

私は考えた挙句、ある名案を思い付いた。それは、いつもフラれて
いる女友達に教えを乞う事だった。

彼女は私に、親切に教えてくれた。

もし、男の人に声を掛ける練習をするのであれば、牛井屋さんに勤めるのが一番よ。なにしろあそこには男の人しか来ないのだから。
なるほど。私は関心した。さすがだ。

早速私は牛井屋さんに入門した。

確かにお客というお客は男の人ばかりだった。

始めは緊張した。なにしろ私は仕事自体が初めてだったからだ。
何もかもが新鮮だった。

お客さんとのやりとりや、お店の店員仲間とのふれあい。

全てはなかなかうまくこなせていった。持ち前の可愛さで。
牛井をよそる腕もなかなかのものになった。
そして私は牛井屋さんを卒業したのだった。

いよいよ私は彼に声を掛けることに成功した。

何気なくお茶に誘い、少し話をした。

彼に女性の好みを聞いたりもした。すると、彼は目がパッチリして
いる子が好きだといった。

私はその日、家に帰ってからずっと鏡を覗き込み、私の目はパッチリしているかどうか確かめたのだった。

私は可愛い。でも私の目は。

次の日、私はまた友人に目をパッチリさせたいが、どうすればいい

か聞いてみた。

彼女はとても腕のいい整形外科医を紹介してくれた。その先生は、とても自然に顔の部位を、思い通りに変えてくれるそうだった。

私は彼女に感謝して、直ぐに連絡を取ったのだった。

しかし考えた。そこまでする必要があるのかと。

別にそこまで彼にこだわる必要が、はたしてあるのだろうか。

しかし恋は盲目とはよく言ったもの。

整形外科まで行く道で、あっさり自分の中で決着は着いていた。

私は彼を振り返えらせるのだ。

私は目をパッチリさせて彼に会った。彼は私を素敵だと褒めてくれた。

しかし、彼は私にもう少し口が小さいといいと思うと言った。

私は迷わず、また整形外科へ足を運んだ。

口を小さくした私は、また彼に会った。

彼はまた褒めてくれた。素敵だ。と。

しかし彼は私に、もう少し鼻がスツとしている方がいいと言った。

私はまたもや、整形外科へ出向いた。

鏡の中の私は、以前の私と別人になっているように思えた。

しかし後悔はなかった。

私は彼の好みの女になったはずだった。しかし、彼が選んだ人は私ではなかった。

私は、初めて失恋という辛い経験をした。

しかし私の何が悪かったのだろう。

私は彼にそれを聞いてみることにした。

すると彼の答えは、今夢中になっているモデルがいて、そのモデルに似ていた子が今のお気に入りだと。

彼はその時々で好みなんか変わる。君もそうだろう。そう言い放つ

た。

私はガツクリと肩を落とした。そして、トボトボと歩いて、気がつくといつももの整形外科の前にいた。

私は先生に訳を話した。

いままでの事。そして叶わなかった恋の事。

先生は親身になって聞いてくれた後に立ち上がり、私の肩に手を置いた。そして、試したことはないが、一つだけいい方法があると、話し出した。

その内容は驚くもので、私は迷わずその整形をしてくれるように頼んだ。

私は彼の前に、新しい顔で現れた。そして、彼に今の好みを聞くと、彼は啞然としながら答えた。

私は、左腕に付けた端末のスイッチを入れ、小型のキーボードを軽快に打ち鳴らした。

すると、四方に付いている画面は立体に、そのオーダー通りの顔を作り上げた。

彼はそれを見て目を輝かせた。そして素晴らしいと、私にようやく振り向いたのだった。それで私は十分満足して、彼を捨てた。

世界の男の人は全て私のものだ。

この四面のテレビ画面の顔は、柔らかい日差しの光を反射しながらいつまでも輝きを放っていたのだった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9656c/>

ラブカクテルス その19

2010年12月14日17時19分発行